法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-09

【図書紹介】　『外から見た<日本文化>』星野勉編　法政大学出版局　二〇〇八年

齋藤, 元紀 / Saito, Motoki

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
60
(終了ページ / End Page)
60
(発行年 / Year)
2009-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007929

Hosei University Repository

【図書紹介】

『外から見た〈日本文化〉』

星野勉編　法政大学出版局　二〇〇八年

齋藤　元紀

本書は、「民学産公」の「地域の大学」として新たに開設された「三鷹ネットワーク大学」において、二〇〇六年五月から七月にかけて開催された本学国際日本学研究所による企画講座「外から見た〈日本文化〉――グローバル化のただなかで」の講義を収めた論集である。

芸術・映画・アニメ・ゲームなど、現在、日本文化は世界から大きな注目を集めている。ところが私たち日本人はこうした状況に自尊心をくすぐられながらも、同時に違和感も覚えている。この居心地の悪さを単純に割り切るのではなく、むしろ積極的に「外からの眼差し」を受け止め、もう一度「足もとの日本文化を見直す」こと、それが本書の狙いである（本書一頁）。

編者は、外からの眼差しと内からの眼差しの双方における利点と欠点に目を配りながら、「自他の文化がお互いに相手の文化を映し出す鏡」となる「比較」の研究方法を提唱している（本書五頁）。「内からと外からの眼差しがぶつかり合う」地点においてこそ、「内からの眼差し」が「相対化」されるとともに、それが準拠する「文化」の「枠」も見直され拡張され、ひいては「異文化理解」も深められてゆくからである（同所）。そのさい編者は、これまでの日本研究の歴史的展開を踏まえつつ、「日本文化」という「括り方それ自体」が見直される可能性も指摘している（本書一三頁）。これは、ともすれば内向きになりがちな日本文化研究に自省を促す重要な指摘と言えよう。

本書に収められた講義は八つある。ベネディクトの『菊と刀』から日本文化への新たな視点を開く星野論文、幕末から明治期にかけて来日したフランス人の日本文化への眼差しを闡明にする相良論文、モーツァルトと日本文化との意外な接点を探るクライナー論文、ろくろ首を主題に日本と中国の妖怪文化の特性に迫る横山論文、小説・アニメ・映画における日本とアジアの横断的関係を描く川村論文、一九世紀から現代までの中国人の日本観の変遷を辿る王論文、欧米人の視点から能楽の魅力を解き明かす西野論文、川端康成と大江健三郎のノーベル賞受賞講演における対照的な日本文化観を論じる勝又論文、いずれも本学第一線の教授陣による刺激的な日本文化再考の試みである。

本学能楽研究所創設のきっかけを作った野上豊一郎は、能を「外国人の目を以って見直し、外国人の頭を以って考へ直す」ことを提言した（本書一三二頁）。しかしこれは能に限らず、広く日本文化研究全般が心すべき言葉であろう。本書を紐解くことによって読者は、自明な暗黙の前提ではなく、まだ見ぬ《異邦》の日本文化に立ち会うことになるはずである。